

第 47 回家族会 『病を力に変えて』

11 月 30 日土曜日に第 47 回の家族会を開催いたしました。参加者は患者さん、ご家族合わせて 13 人でした。今回の講師は理学療法士の後藤隆弘さん。今でこそ、元気に理学療法士として患者さんの前に立っていますが、入院中は大変だったそうです。そんな入院中のお話や、社会復帰を果たすまでのお話をお聞きしました。



今年の 3 月に頭が痛くなり病院に受診するも、その場では診断がつかず、一度帰宅したそうです。その後意識の消失があったため、脳外科に救急搬送され、クモ膜下出血と診断されたそうです。幸い一命は取り留めましたが、検査で未破裂の動脈瘤もみつかりコイル術を施行され、血管攣縮により言語障害が出現し、カテーテル治療にてステントを留置するなど、入院中に一歩間違えば今のような生活はできていなかったそうです。

20 日間の入院中は安静が続いたため、廃用にもなったそうです。入院しているという焦りもあり、自分でトイレなどに行きたいと思って、止められていたにもかかわらず、歩き出すもフラフラしてしまうこともあったそうで、廃用症候群になったことを実感したそうです。

看護師さんなどに迷惑かけないようにとコールを押さずに自分で動く患者さんの気持ちがわかったとおっしゃってありました。

言語障害が出現したときは、メールの文章を打っている際に、言葉になっていないことに気がついたそうです。PT なのですぐに言語障害だと気がついたそうですが、それを看護師さんや医師に伝える際にうまく伝えられなかったそうです。うまく伝えられなかったのですが、医師はすぐに理解し検査をしてくれて血管攣縮による血流障害が起こっていることを突き止め、カテーテル治療にて改善することができたとのことでした。



なんとか障害が残らず退院できたものの、入院中に落ちた体力などはすぐには戻らず、退院直後は日常生活を送るだけで大変だったそうです。病院という限られた空間から自宅に帰っただけで、近所のコンビニに行くことすら大変だったとのことでした。

そんな中で、今のままではいけない、病気に負けてはいけない、社会復帰するんだと思い、大切な友人に勧められランニングを開始したそうです。

はじめはもちろんジョギング。すぐに息が上がる。でも毎日毎日繰り返し走ることで、徐々に体力が付き、自身の変化に気づき、それが喜びとなり、さらに続けていけたそうです。

す。今ではマラソンを走るまでに回復し、先日初めてのマラソン挑戦にて 3 時間半を切る記録を打ち立てたそうです。

理学療法士として知識があるために、病気になった時は落ち込んだとのことでした。でもそこを乗り越え前向きになれたのも、家族や大切な友人などの存在があったからこそだとお話ししてくれました。

病気は誰にでもかかる可能性があります、そこから立ち上がり、一步を踏み出すには相当な勇気と覚悟が必要だと思います。そんな時やっぱり家族の存在って大きいのだなぁと感じました。わたくしにも待望の子供ができました。毎日成長していく子供の様子を見ていると、家族のために頑張らなければと今までよりも強く感じます。

その人のために頑張ろう。その人のために良くなろう。そんな想いを胸に秘めている患者さん達に少しでも寄り添い、少しでも力になれるよう今後も自己研鑽に励みたいなぁと思うきっかけをくれたお話でありました。

協力してくれた後藤さんに感謝です。本当にありがとうございました。

原田